

# 新飛泉

第18号

(株)イメージプラン飛騨  
〒506-0808  
高山市松本町2118-27  
TEL 0577 35-2360  
FAX 0577 35-0507

<http://www.image-plan.com>  
taruhida@iilac.ocn.ne.jp

発行責任者 下裏祐司  
編者 内木俊示

## 今月の紙面

特集記事  
「高松塚古墳と人為的ミス」  
縦割社会の官僚構造に原因がある  
という言葉をよく聞きますが、実際には人為的ミスで片付けていることが多くのように思われます。

## 高松塚古墳と人為的ミス

一つの失敗もしないで一生を終えるという人はいません。これは断言しても大丈夫だと思います。その失敗の大きさは様々でしょうが、小さな失敗であれば、ごく最近起きたという記憶をお持ちの方もたくさんいらっしゃると思います。

これをお読みになっている方は是非一番最近自分がやってしまった失敗を思い出していただきたいと思えます。失敗の大きさは問いません。思い出せましたでしょうか。思い出せましたら、その失敗の原因は何であつたかを考えてみてください。もし、すでに考えたという方がいらつしやいましたら、申し訳ありませんが、再度お考えください。

お考えになられた原因は仕組みにあつたでしょうか、それとも人為的なミスだったでしょうか。そこからどのように再発防止につなげていくかを考えてみましょう。特に人為的なミスだと思われるような問題にはどのように立ち向かえばいいのか、高松塚古墳の壁画問題での調査委員会の報告がとても参考になりますので、その例を挙げながら考えていきたいと思えます。

奈良県明日香村の高松塚古墳（特別史跡、7世紀末 - 8世紀初め）の国宝壁画損傷事故やカビの大量発生問題で小坂憲次文部科学相は6月19日、「防カビ対策は不十分で、情報公開も不適切だった」として、当時の文化庁幹部や担当者計4人を20日付で減給や戒告の処分相当などとすると発表しました。

さらには組織としての監督責任を明確にするため、文科相が給与の全額、河合隼雄文化庁長官が20%、加茂川幸夫同庁次長が10%をそれぞれ1カ月分、自主返納します。

壁画損傷問題などを検証する同庁調査委員会（委員長・石沢良昭上智大学長）が同日、調査報告書を提出したことを受けた措置でしたが、この報告書は「文化庁の縦割り構造とセクシヨナリズムを背景とした無責任体制に起因する」と組織としての構造的な欠陥を厳しく糾弾したものになっていきます。

カビの大量発生問題とは、石室と保存施設の間、「取り合い部」天井の崩落防止工事の後、カビが大量発生したことです。これはカビの発生が人間の不注意によるものであるという人為的なミスで片付けていいものなのでしょうか。工事のプロセスの中で確かに人為的なミスもあるかもしれませんが、しかしすべての原因が人為的なミスに起因するののかという検討



高松塚古墳 外観

次頁に続く

# 高松塚古墳と人為的ミス

また、保存修理マニュアルについては、東文研内部では石室外でも防護服の着用が常識と認識されていたが、その意図が明記されていないなどの不備があったと指摘しています。このため、作業者によってとらえ方が異なり、保存管理の手法が統一されていなかったとしました。

ここでも、マニュアルをしつかり理解していなかったという原因で終わらせるのではなく、マニュアルに「意図」が明記されていないことにより、理解度の不足が生じたとしています。

単なる人為的なミスに終わらないことに非常に高い評価をしたいと思います。人為的なミスだけでは、何の対処もなく終わる可能性もあります。所謂反省のみというものです。人為的なミスの裏には、仕組みとしての問題が隠されている可能性があります。そこに気づいたとき、効果的に人為的なミスを減少させることができず。

壁画損傷問題とは、石室でカビ

の除去作業をしていた担当者が誤って室内灯を倒し、西側の壁に当たって男子群像の衣服の一部、約1センチ四方がはがれ落ち、同時に空気清浄機も倒れ、西壁の絵がない部分に長さ8センチの傷をつけたにも関わらず、文化庁が公表しなかった問題で、同庁が報道機関などの問い合わせに備え、壁画の損傷を「自然劣化」と説明し、事実を隠へいしようとした。

人為ミスによる壁画損傷の事実を意図的な隠へいを示す資料は、担当の美術学芸課内で作成された2002年3月15日付、A4判1枚のメモで、報道機関から最新の壁画画像の提供を求められた時の対処について「発見当時の画像と比較されてもやむを得ない。その場合は経年による自然劣化と説明」「文化財部長了解」などと記されています。

壁画の損傷自体については、調査委員会では「重大な過失があったとは認められず、やむを得ない」としましたが、公表に関し、当時

の美術学芸課長と主任文化財調査官が「絵がないところなので通常の絵画の維持・管理で対応できる」と担当課長レベルで処理したことと問題視し、上層部まで確実に情報が伝わるようにすべきだったとしました。

ここでは、実際の損傷問題については不問とし、その後の処理（報・連・相）に対して言及していません。どのようなレベルの問題であれば、どこまでの報告が必要であり、誰がその責任を負うのかということがはっきりしていれば、隠へいにつながる可能性も減ってくる可能性があります。また、どの程度のトラブル予測がで

高松塚古墳 壁画



きているかも関連してくると思います。想定範囲を上げる姿勢も求められると思います。

実際の損傷したことに關して、これを人為的なミスとして放置した場合、同じような損傷が発生する可能性は減少しないでしょう。この事件からしばらくの間は「室内灯を倒さないように」というような意識を持った活動がなされ、ミスは起きないかもしれませぬ。しかし、この問題自体の記憶が薄れていけば再発しないとも限りませぬ。

人為的ミスが起きた場合、その原因についていくら考えても、その真因を特定するのは困難なことになります。もちろん、人為的ミスの裏に潜む仕組みの問題に目を向けることは大事ですが、やはり人為的ミスだと判断した場合はその結果に着目すべきです。今回は室内灯を倒したことによる損傷という結果になっています。ここに着目し、倒れない倒れにくい室内灯を使用するという是正処置を考えればいいのです。

人為的なミスには結果だけを見て、良くする方法を考えると、思考が大事なのです。

(了)